2018年2月4日

ロータリー米山記念奨学会財団設立50周年記念式典

記念講話

阿部志郎氏

冨を残して死ぬるは恥なり。

アメリカの富豪、カーネギーの言葉です。

いま、理事長のお話にありましたように、米山梅吉に遺産がありませんでした。それどころか、米山が作りました小学校の教員の給与を払うのに、春子夫人が質屋通いをしたと。ご令息、桂三さんの思い出であります。

すべてを捧げた人でありました。青山学院初代院長の本多庸一と言う人の影響を強く受けまして、本多はキリスト教でメソジスト派に属しておりましたので、その関係でアメリカでオハイオ・ウエスレヤン大学に米山は学びました。このメソジストをはじめましたジョン・ウエスレーという人の教えを米山は学んだのです。

ウエスレーは、「Gain all you can, Save all you can, but Give all you can」。

できるだけ儲けよ、できるだけ蓄えよ、しかし、できる限り与えよ。

米山は、それを実践した人であります。

米山は小学校を作りました。幼稚園を作りました。それは、本多庸一に対する恩に報いるためであります。米山梅吉は恩義の人でございました。

先ほどのパネラーの人々の話を聞いておりまして、奨学金を受けた方々がみんな恩義の人であることに、私は深い感銘を受けました。

米山はクリエイティブな、先駆的な構想を持った人でありまして、それを決断し、実行できる行動の人でもありました。

アメリカから信託業務を導入し、三井信託を建て、ロータリーを始め、三井報恩会を組織した人でありまして、その三井報恩会にいる時代、全国にハンセン病の療養所が当時15ございました。それを米山は歴訪して、病者をなぐさめ、励まし、手土産を持ってまいりました。隔離・差別されておりましたハンセン病の療養所というのは、いわば地の果てにございまして、あるいは孤島でございまして、当時、どんなに不便であったかと思いますけれども、米山はそこに出かけております。そして報恩会を通して、ハンセン病の療養所に3,000ベッド寄付をいたしました。これで全国の療養所のベッド数がようやく1万ベッドになったのでありまして、米山梅吉は愛の人でございました。

いまご紹介いただきましたけれども、米山が作りました緑岡小学校、春子夫人の緑岡幼稚園という間に挟まれた家で、私は生まれ育ちました。たびたび米山夫妻の顔を見ました。「おはようございます」と、帽子を脱いでお辞儀をする程度でございますけれども、春子夫人とは戦後2回お会いいたしました。小学校の6年生のときに、父親に言われ、父親の代理として正月の元日の朝早く、年始に回るのです。昔は名刺を置いてくるだけでございますけれども、私は米山の家に行って名刺を置いてきたのを覚えております。子どもの時、米山が何をしたか知っておりましたので、私も米山のような人物になりたい！そう思いまして、大学では経済を専攻いたしました。故あって、経済の実業の道へは進むことができませんでしたが、今でも米山梅吉を忘れたことはありません。

子どもに、そのあとをついて行こうと心を決めさせる、生涯それをイメージとして描いている。米山という人は、そういう魅力ある、ある意味でのオーラを持った人物だったと、今にして思います。

この米山を、今日のパネラーたち、そしてここにお集まりの皆様方がそのスピリットの継承者でございます。経済学の父といわれるアダムスミスが、経済活動をする人にとって必要なのは、傾ける耳、涙する目、差し伸べる手だと、指摘しております。米山はそういう人でありました。経済活動に対し、社会に対し、世界に対して、米山の生き方を私どもは学ぶべきだろうと思います。皆様方それぞれの人生において、米山のあとをついて行こうではございませんか。